

## 小田急線相模大野駅周辺の変貌

2023年12月16日

真の文明ハ山を荒らさず川を荒らさず

Lib 活 県民が編むかながわの半世紀

村を破らず人を殺さゝるべし

第2期・チームC

1912年6月 田中正造(1841-1913)

まえがき

### 1. 県土について

「県土」を Japan Knowledge personal と『広辞苑』で用例、語釈、初出を調べたが不明であった。従来の土木部・建設部・道路部という用語が「県土」に統一された時期を神奈川県で調べた。それは1997年「かながわ新総合計画21」を策定後の1999年であり、土木部は「県土整備局」にその名称を変更した。

### 2. 変貌について

図書館に「変貌」のタイトルを用いた書物や雑誌の特集号が数多く配架されている。例えば「人類の変貌」「ナショナリズムの変貌」「戦後社会の変貌」枚挙に遑が無い。街で偶々新店舗の開店に遭遇するが、以前の景観を直ぐに憶いだせない。「外発的変貌」は住民側が外的要因によって強制され、短時間に表層が変容する、変容させられるタイプを指す。一方「内発的変貌」は住民側の内的な要因と選択のもとに、主体性がある、多様な生活空間に変容するタイプを指す。「外発的変貌」と「内発的変貌」の関係は複雑に入り組んでおり、空間と時間が交差する現場の地域活動は地域住民による更に複雑な変貌を歴史のなかで頻りに繰り返す。

はじめに

このレポートは高度成長期以降の「小田急線相模大野駅」と「現工事中のタワーマンション地域」の変貌を「軍都相模原」「米軍基地相模原」「都市化相模原」三視点から述べる。同時に当該地域を理解する上で必要な「地域の歴史」を最小限記した。「外発的な変貌」は「外貌」と略し「内発的な変貌」は「内貌」と略した。典拠史料は主に『相模原市史』『相模原市史増補篇』『日本歴史地名大系14 神奈川県の地名』を用いた。

### ◎ 外発的変貌 その1 「小田急線相模大野駅」の場合—図3~6を参照—

外貌⇒小田原急行鉄道(現小田急電鉄)は1927年に新宿・小田原間が開通し、大野村谷口深堀付近から分岐した江ノ島線の工事は1928年に着手1929年に開通した。小田急信号所(現相模大野駅)が小田原・江ノ島線の切替をしていた。1938年に小田原・江ノ島線の分岐点に通信学校駅(1941年相模大野駅と改称)が開業した。

内貌⇒小田急線開通に際し、現相模大野駅~現町田駅間の膨大な埋め立て工事に際し、周辺住民と一緒に尽力した大野村出身高橋瀧蔵氏の謝恩碑が現上鶴間本町・青柳寺上の元踏切の地に建立されている。

外貌⇒1937年に東京市ヶ谷の陸軍士官学校が大野地域に隣接する新戸・磯部・座間にわたる地域に移転した。1938年に臨時東京第三陸軍病院(野戦病院)、1939年に電信第一連隊(東部第88部隊)、陸軍通信学校、1940年に原町田陸軍病院(のち相模原陸軍病院と改称、衛戍病院)が開設された。1945年に第三陸軍病院は国立相模原病院となり、陸軍通信学校は相模女子大学、公立小中高となった。1945年に陸軍士官学校は米軍に接収され、キャンプ座間となり、同年電信第一連隊と相模原陸軍病院は接収され、米軍の住宅地区と米軍医療センター〔外発的変貌その2を見よ〕として、使用された。

外貌⇒相模原が主に畑作と養蚕で生計を維持する農村地域から軍都相模原に変貌できた要因は首都東京に近く、近代的な軍備に必要な廉価で広大な敷地を確保できた。軍都建設に必要な不可欠な交通手段は鉄道が横浜線と小田急線が走り、道路は軍用道路として国道 16 号線が 1939 年に建設された。行幸道路(現県道 51 号線/町田厚木線)は昭和天皇の陸軍士官学校(現米軍座間キャンプ)陸士第 50 期生卒業式行幸を目指して地元の青年団や勤労学徒らが、昼夜の突貫工事に携わり 1937 年 12 月までに拡幅整備を行った。

その後の相模大野駅とその周辺の変容については〔外発的変貌 その 3〕を見よ。

### ◎ 外発的変貌 その 2 「米軍医療センター」の跡地利用—図 1, 2 を参照—

外貌⇒現在 41 階建タワーマンション工事中(2020 年～2025 年に完成予定)の地域は戦後その跡地に「米国陸軍医療センター」が 1981 年の返還時まで所在した。返還後の跡地利用は相模原市が「商業・文化の核」と位置付ける「米軍医療センター跡地整備事業」(面積約 19 ha)を 1981 年から開始した。

内貌⇒住民参加の跡地利用計画で 1990 年に相模大野中央公園が造営され、グリーンホールと多目的ホール、市立相模大野図書館が開館した。1990 年に伊勢丹相模原店が開業するが 2019 年に閉店した。米軍基地返還後の跡地利用は文化施設の開設と住宅地化は促進したが、商業地化の動きは鈍い。

外貌⇒敗戦後、長年にわたり駐留する米軍基地(1945 年～返還未定・内一部返還)の問題点は多々ある。

神奈川県と相模原市が抱えている米軍基地問題は沖縄と本質的に同じである。日本政府と裁判所は日米安保条約と日米地位協定に則り、当該住民の意思決定は尊重されず、住民の意向をなかなか認めない現状がある。

内貌⇒米軍基地返還運動(～2023 年現在迄、継続中)があり、戦車闘争(1972 年ヴェトナム戦争時)があった。

### ◎外発的変貌 その 3 都市化・商業化する相模大野駅と周辺の変容—図 2～6 を参照—

外貌⇒1970 年代の相模原に中心的な広域商業地がなく、購買力が市外(八王子、町田、厚木、横浜、新宿)に流出していた。相模原市は「商業・交通の核」として 1972 年から「相模大野駅周辺土地区画整理事業」(面積約 32 ha)を開始し、事業は 2000 年に完了した。相模大野は区画整理と再開発事業で商業核を整備した。

外貌⇒市は 1983 年に「相模原市商業振興ビジョン」を策定する。その結果、相模原市の「商業振興」政策は商店街支援から、都市間競争を意識した拠点機能の充実に軸足を移した結果、地元商店は変容した。

外貌⇒市は 1983 年に「ふれあいと創造のまち相模大野」をテーマとする基本計画を策定した。

外貌⇒2006 年から「相模大野西側地区再開発事業」(面積約 3.1 ha)を開始し、事業は 2013 年に完了した。

外貌⇒多数市民の反対意見にもかかわらず、2010 年に相模原市は政令指定都市に移行した。

外貌⇒伊勢丹跡地にタワーマンションを建設中である。完成後の人口急増とインフラ整備が懸念される。

### 結論

日本の近現代史を通して、相模原は特徴的な独自の「外発的変貌」と「内発的変貌」を何回か繰り返した。

外貌タイプは軍都相模原時代の軍事基地建設事業と戦後の米軍基地駐留を仮定した。内貌タイプは相模原市立公民館の諸活動である。大野南公民館の各部屋には、公民館設立の基本理念である〔であい、ふれあいを通して地域の交流を進めます〕〔主体的に学びあい、育ちあい自らを高め地域社会に貢献します〕〔くらしの文化を大切に、心と体の健康づくりを目指します〕を掲示する。市内に 32 ヶ所ある公民館に集う人々は地味が目立たないが、戦後の設立から今日まで、様々な分野の活動に継続して積極的に参加し、地域文化の担い手として、よりよい生活空間確保のために、自主性を以て「内発的」に尽力している、と仮定した。

1975年に相模大野駅に計画された“場外馬券売り場誘致”を断念させた市民たちは日頃から育んだ成果を生かし、沈着冷静な組織づくりと判断力で「内発的」に活動した。相模原の「内発的変貌」の象徴は季刊誌『アゴラ』、情報誌『ここずたうん』等々、住民による、住民目線の、住民のために、地元の確実な情報を冷静に伝える定期的な媒体の存在であり、同時にその情報を発行するために、堅実な礎を発行者と共に支え、一緒に伴走を続ける「相模原の民間学者たち」と称すべき「無名の市民たち」の活動である。

## あとがき

戦前の相模大野駅周辺は農村地域から軍都へ変貌し、戦後は米軍基地と住宅地・文化施設・商業地域が混在する市域へ変貌し、今も継続中である。当レポートは具体的な史料に基づく時々の住民活動の有様は述べていない。また、政府や官庁の国土計画、首都圏計画、神奈川県のみならず、国土計画との興味深い関連性は省いた。

## 謝辞

このレポートを作成するにあたり、以下の方々、諸機関をはじめ、多くの方々から貴重なご意見やご助力をいただきました。ここに心から御礼と感謝を申し上げます。

先行研究者の涌田佑氏/金原左門氏/栗田尚弥氏/浜田弘明氏/箸本健二氏/木村弘樹氏の学恩に深謝する。  
相模原市史編纂室/相模原市立公文書館/相模原市立相模大野図書館/相模原市立大野南公民館  
季刊『アゴラ』/フリー情報誌『ここずたうん』/神奈川県立図書館地域情報課/大西比呂志氏

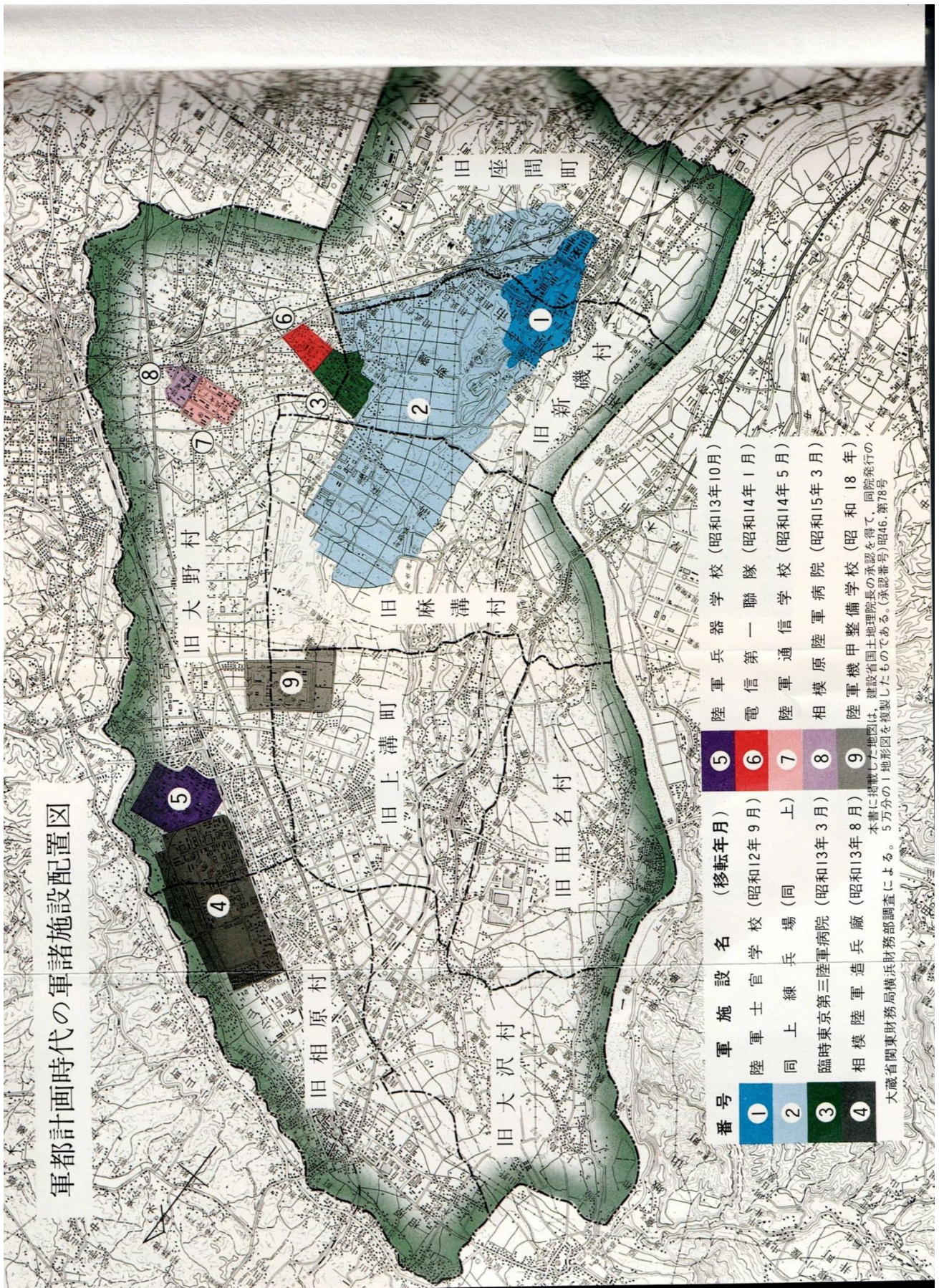
## 引用文献・参考文献一覧

- 相模原市立総合学習センター編『私たちの相模原』2009年 177頁。  
相模原市市史編纂委員『相模原市史』第4巻 1988年 折込地図。414頁。594～600頁。  
相模原市市史編纂室編『相模原市市史現代図録編』2004年 22～23頁。74～75頁。92～93頁。202～205頁。  
相模原市教育委員会編『相模原市史現代テーマ編』2014年 54頁。72～75頁。388～390頁。573～577頁。701～727頁。  
相模原市教育委員会編『相模原市史 近代資料編』2017年 56頁。422～433頁。546～557頁。826～1043頁。1026頁。  
相模原市教育委員会編『相模原市史ノート』第1号～第15号(2004年～2018年)  
第1号 4～31頁。第2号 3～20頁。第4号 3～15頁。第15号 1～27頁。73～99頁。  
涌田佑・涌田久子著『相模原事典』日相出版 2018年 87頁。97頁。185頁。228～234頁。  
浜田弘明他著「地域を知る講座」－相模大野の戦後－ 相模原市立大野南公民館 2022年  
相模原市都市建設局「地域を知る講座」－相模大野のこれから－ 相模原市立大野南公民館 2023年  
神奈川県土木部編『神奈川県の土木120年』神奈川県 2000年  
陸軍陸地測量部「明治迅速図・原町田村」国土地理院 測量期間 1880年～1884年  
相模大野周辺の環境を考える会編著『場外馬券売り場誘致計画白紙撤回に向けて』1998年  
神奈川県立図書館「首都圏計画の推移」Lib活第2期資料 神奈川県立図書館地域情報課 2023年11月13日配布  
原武史著『地形の思想史』角川書店 2019年 197頁。  
「神奈川新聞」「東京新聞」「毎日新聞」「朝日新聞」「読売新聞」各紙の神奈川・三多摩版を適宜に参照した。

## 協力機関

国会図書館・神奈川県立図書館・相模原市立相模大野図書館 <https://japanknowledge.com/personal/>

図1. 軍都計画時代の軍諸施設配置図 出典『私たちの相模原』1988年 177頁





[93-1] 米軍医療センター跡地 相模大野  
1985(昭和60)年5月11日  
跡地利用は、県立高校や公園など地元利用の要望を含め  
1983(昭和58)年12月に決定した。



[93-2] 建設中の公園ロビーシティ相模大野五番街  
相模大野  
1986(昭和61)年8月17日  
国利用分には、1,000戸規模の公団住宅が建設され、  
1988(昭和63)年に入居が始まった。



[93-3] 相模大野中央公園  
1992(平成4)年3月  
医療センターの返還によって、相  
模大野駅に近接して公園や住宅、  
公共施設の建設が実現した。

**ワンポイント** 相模大野中央公園：1989(平成元)年12月に開園し、現在の面積は2.7ha。噴水や芝生広場などが整備され、「相模大野まどうまつり」の会場となっている。

図Ⅲ. 昭和10年(1935)頃の相模大野(渋谷保二画)  
出典『相模原市史 第四巻』1988年 414頁



昭和10年頃の相模大野(渋谷保二画)  
前方家屋は小田急信号所、当時小田原・江の高線の切替をしていた。その奥の山林は公園通り、道に面して40年ぐらゐの杉があり、左側は数十年にもなるくぬぎの大木数本、他になら・くぬぎ・栗などの雑木林、右側は松林、道に面して杉が植えてあった。一面の笹やぶであった。

図Ⅳ. 相模大野駅周辺 1959年  
出典『相模原市史現代図録編』2004年 22頁



【22-3】相模大野駅周辺 1959(昭和34)年  
国道16号の小田急線跨線橋から西方を望む。写真の小田急線の電車はチョコレート色で、駅周辺には畑や林が広がる。

図Ⅴ. 相模大野駅周辺 1993年  
出典『相模原市史現代図録編』2004年 23頁



【23-3】相模大野駅周辺 1993(平成5)年  
駅ビル建設の工事が始まり、鉄骨が建ち始めているのがわかる。南口(左)にも、ビルが目立ってきた。北口(右)駐車場も立体化している。

図Ⅵ. 相模大野駅周辺 1996年  
出典『相模原市史現代図録編』2004年 23頁



【23-4】相模大野駅周辺 1996(平成8)年  
1996(平成8)年秋に14階建ての駅ビルが完成し、百貨店(1998年撤退)やホテルが開業した。